

〈質疑応答・意見交換〉

北村：それでは先程の3人の発表をうけまして、今日ここに集まりいただきました皆様の方から質疑あるいはコメントをいただければと思います。まず少し私の方から太田さんに確認したいんですけども、大分長い期間に渡ってSCCの活動を続けていらっしゃいますが、総合型というと一般的に中学校区を一つの基準にしようという話があるわけですけども、SCCさんの場合メンバーはどういったエリアから来られるんでしょうか。

太田：教室をやってる近隣の方がベースで集まって来るんですけども、鴨池でやってる私が一番最初に立ち上げた総合型の陸上教育クラブには、中学生とか一般社会人の方は非常に遠方から来ている方もいらっしゃいます。中学生とかも湧水町から来てる子とか、国分の方から通ってきてる子とかいらっしゃいます。

北村：かなり広範なところから人が来ているようなイメージでしょうか。それともやはりある程度、核になる部分は鴨池を中心とした辺りから大勢がということでしょうか。

太田：そうですね、今言った中学生、大人のブロックはもう本当に、地域コミュニティということではないです。もう本当に鹿児島市全域から車で皆集まって来てるような感じです。

北村：ありがとうございます。鹿児島市で陸上競技のクラブやるというところ、太田さんのところにたくさん入ってるのではないのかなと思いますけども、先程紹介がありましたように、そういった鹿児島市一円から太田さんところに集まって来ていて、その中でアスリート達の底上げが進んでいって、非常に沢山の選手を輩出と言いますか、そういった形で関わっていらっしゃるのかなということを思いました。それに対しては川前さんのところはフットサルを中心にされているわけなんですけども、協会等には属さない方が多いというお話でしたけども、例えばここでフットサルをやって、そこからもっと真剣にやってみたいというような少し志向が変わっていく方はいらっしゃるんですか？

川前：昨年の実績ですけど、クラスマッチから2チー

ム、フットサル連盟さんの方に加入されたと聞いてます。

北村：フットサル連盟に加盟をしてクラスマッチの方の活動はまだ続けているんでしょうか。

川前：シーズンが大体5月から1月なので、今の時期、1月から4月ぐらいにはやはりいらっしゃっています。

北村：そういった方達にとってみれば、フットサルをやる機会が増えていった、広がったというふうに見えるわけですね。山下さんの薩摩川内市では、今日の新聞に4月から会社を立ち上げるなんていう話がニュースになっておまして、観光協会ともう1つ何か組織を解体しまして株式会社を立ち上げるという非常に先進的な取組みをされているようなところなんですけども、そういったところのいろんな事業等をこれから考えていらっしゃると思うんですけども、そのスポーツというのをキーにした時に、今、甕島ではこういったことをされている。薩摩川内市全体として何かこういうことをやっているし、こういうことをまた考えているというところがあればご紹介をいただければと思うんですけども。

山下：今日の新聞に出てて、その件については我々としても内々に会社を興すというようなことを聞いていました。市内においても、合併で4町4村という、元々がばらばらという言い方は失礼なんですけど、それぞれ個性が揃っているものですから、今後は本土側でも現在やっているイベントもあるんですけど、今日は市民スポーツ課からも来られてるんで、そういう合宿を含めて、1つのシーズンではなくて1年間を通したところで考えていければ良いのかなとは思っております。

北村：ありがとうございます。こういったスポーツを通しての町づくりということで、今日来ていただきました地元鹿屋市の方にお聞きしたいんですけども、本学と産学官連携という形でスポーツ合宿町作りというのを行ってこられていますけども、3年の計画というふうにお聞きしてるんですけども、今後の展開というのは、また何か発展していくようなビジョンがおりなのかどうかというのは、少しお聞かせ願えればと思いますけども。大村さん。

大村：鹿屋市市民スポーツ課の大村です。誠に申し訳ないんですが、市管課の方が市民スポーツ課とはまた別の課がありまして、そちらで進めているんですが、今の情報では引き続きまた続けようかということに進めていると思います。

北村：ありがとうございます。今後も継続してプロ野球選手、トップアスリートの合宿、自主トレーニングを受け入れていくということですが、そういったことをお考えの自治体、垂水市、始良市、それから志布志市等々今日来ていただいていますけれども、そういった計画をお持ちの自治体はいらっしゃいますか。垂水市なんかはどうでしょうか。今日は企画課の方からも来ていただいていますけれども。

野嶋：今回はスポーツを通じた地域振興ということで、今一所懸命考えていたのが、今日のお話は民間の方々の力そのものであったり、それを活用したり、また自治体さん独自のこのスポーツを通して地域振興ということの事例があったところですが、私が行政の立場なものですから、行政というと、どうしても自分のその自治体のエリアの中で、自己完結型で市民の方々の健康をどうにかしようということで納まってしまう。例えば今日お話をさせていただいた中では、今日おいでいただいた方々とも連携をしたいとかコラボをしたい。民間の方々との活用という方向等を今からは探っていくかといけないうんじゃないか。例えば、今、垂水市としても鹿屋体育大学さんと色々連携をしながら貯筋運動を始めとして、今後スポーツ基本法の制定に伴っていろんなまた垂水市の方々の市民の健康づくりについて色々考えているところなんですけれども、そういうふうに自分達のエリアだけじゃなくて例えば外、また市民の方がそういう民間のスポーツイベントに参加する、それを支えてあげるのも1つの市民の方々への健康作りの一環にもなるんじゃないかなというようなことで、凄く今日の話が勉強になったなというふうに思っているところです。

黒須：今お話をお聞きしてまして、やはりかつての右肩上がりの、経済に支えられて幅広い分野で色々な公共サービスを提供してきた、そういった行政も現在では深刻な財政難、お金も人手もないという中で、いかにその多様化する住民のニーズに応えていくかという

ところで、住民との共同であるとか、企業の民間ノウハウの導入であるとか、大学との連携とか、横に広がって、縦割りというよりは横串を刺していくなどということが各地で行われているかと思えますし、もう1つ行政がこれまで助成金とか、財政的な支援をしてきたことがなかなか難しくなった時に、人的な交流を促すという専門家を紹介したりとか、そういった情報という価値を行政の方が提供することで、横串というか、今まであまり共有できなかったようなもので新しい価値を見出すというような取組みをされているところが増えてきているのかなと、そんなふうに感じます。

北村：先程、発表いただきました甑島にしても垂水にしても、自然環境が非常に豊かなところでして、例えば垂水市であればキャニオリングを打ち出すようなことをされていますし、甑島は非常に自然環境豊かで、何も無いところなんですけれども、逆にその何も無いところが新しい価値を持つ可能性がありまして、健康づくりということで考えていくと、例えば少しブームになりましたけれども海辺でヨガをすとか、ヒーリングと健康というような組み合わせは割合受けると思いますか、都会受けをするプログラムだと思うんです。ですから、そういった垂水市、薩摩川内市、甑島等々で持っている自然環境を上手く健康づくりという視点でも活かせるでしょうし、スポーツというとなかなか施設の面であったり難しい部分もあるかもしれませんが、身体活動、レジャー・レクリエーションという形で考えていくと、非常に可能性をもっているのではないかと私は思っております。健康づくりという視点等ありますが、今日は県民健康プラザからも来ていただいておりますけれども、鹿屋市にこの県民健康プラザが置かれているということは、鹿屋市民にとっては非常に大きな財産の一つだと思うんですけれども、県民健康プラザの取り組みとしまして、県民についていますけれども、鹿屋市の住民たちに対しての取り組みといたしますか、健康づくりの為にこういったことをやっていけるんだと、そういった中で鹿屋体育大学とこういう連携をとっているとか、あるいは連携をとりたいたかということがございましたら、発言をいただければと思います。

藤崎：健康増進センターの藤崎と申します。よろしくお願いたします。私共も色々研究事業とかも行って

ているところなんですけれども、また事業に関しても鹿屋市と連携をとっているんな事業を行わせていただいております。そういう中で体育大とも連携をとりながらということなんですけれども、始まりの頃は体育大とも色々とデータのやりとりとかをしながら研究もしていたところなんですけれども、最近は少しそのあたりができていなくて、どういう形でこれから連携がとれるのかなあと常々話したりはしているんですけど良い案がなくて。今日もできたら体育大と何かまた新たにできないかなあと思いつながら来ました。データとか、そういうものは沢山あると思いますので、是非活用していただけたらいいかなと思います。

北村：ありがとうございます。これを機会に関係を変えていただくことなのかなというふうに思いますけれども。今、本学で取り組んでおります貯筋プログラムというのを一生懸命やっております、今日お越しただいている垂水市の方では指導者の養成をやったり、それから志布志市の方も今日来ていただいておりますけれども、志布志市とも連携をとりながら貯筋の普及ということをやっております。志布志のタカノさんにお聞きしたいんですけれども、志布志市は比較的、文化事業をよく招致されているなというイメージが私個人的にはあったんですけれども、スポーツという点で何かこういった取組み等をやっているとか、あるいはこういったところに力を入れているという部分があればお話ししたいと思います。世界記録を出すような選手もいる町ですので、お話をお聞かせいただければと思います。

高野：志布志市教育委員会の高野といいます。今、出ましたけど、昨年は志布志は非常にスポーツの方で盛り上がりまして、3月ぐらいに相撲の地方取り、関取が誕生いたしました、それから山口君が国体で世界新記録を作ってくださいました。また、同じく国体の4×100mリレーでは志布志市に関連する選手が4人の中で2人程いらっしゃいまして、それでもまた盛り上がりまして。先般、尚志館高校が大隅半島初めてで、純粋な大隅半島の選手だけのチームで今度甲子園に出場するというので、非常に目まぐるしい1年を過ごしているんですけど、志布志の方ではスポーツツーリズムに非常に現在力を入れています。特に夏のサッカーフェスティバルというイベントがあるんですけれ

ども、12日間で高校生の練習試合をするんですけど、去年が101校、ここ2年程100を超える高校生が県内外から来まして、県内は40ちょっとのチーム数なんですけど、県外が50いくつということでありました。先般の選手権の中で、宮崎の鵬翔高校が優勝したんですけど、その中で決勝のPK戦になる前に円陣を組んだ時に「夏の志布志での合宿の方がずっときつかっただろう」というようなキャプテンのコメントが載っておりました。今は楽しんでこいということでもみんなにPKを蹴らせたなら、みんな入って優勝できたというようなことが新聞、報道等でも載っていて、非常に嬉しいことだなあということを考えております。夏のフェスティバルだけでも経済効果が約1億を超える試算が出ているのではないかと、これは観光の方で試算をしているんですけど、1億ぐらいは出ているのではないかと。春に去年、一昨年から仕掛けているんですけど、アンダー15のクラブチームのフェスティバルということで、滋賀県の監督さん等、連携を図りながら、去年が30チームぐらいだったと思うんですけど、それを今年の3回目は倍近くもっていければなということで現在動いていて、それにまた力をつけていきたいなというふうに考えております。

北村：ありがとうございます。志布志が今スポーツで盛り上がりつつあるということの理由が少し分かったといいますか、理解できたような気がいたします。この生涯スポーツ実践センターの協力者会議ですけども、教育委員会の方々にもお越しいただきますし、それから健康増進関連のセクションの方々にも来ていただいております。そういった意味では先程の黒須先生の方からご指摘がありましたような、横串を刺すような役割を生涯スポーツ実践センターというのは持ち合わせているのではないかなあと私は考えておりますし、それからこういった機会にいろんなセクションの方がお集まりいただいて、それぞれの意見というものに耳を傾けていただくことで、従来の縦のつながりではなくて横に広がっていくようなスポーツであったり健康づくりであったり、といったことの推進が期待できるのではないかと考えております。では、本当はもっとフロアの方からもお話をお聞きしたいんですけれども、時間も押しておりますので、最後にコメントーターの黒須先生の方から少しまとめいただければというふうにお願ひします。

黒須：皆さんすでにご存じのことかとは思いますが、福島は依然として厳しい状況が続いています。人口流出をいかに止めるかとか、地方都市の疲弊した中心市街地とか、商店街にいかにお息吹を吹き込むかとか、地域社会の信頼関係とか、無縁社会とか、高齢者の孤独死とか、そういったものと信頼関係を構築するかとか、人々が理解と希望をもって生きるにはどうしたらいいかとか、若者の雇用の問題とか、そういった問題が山積んでいます。そうした中で私がスポーツだけをやっているわけにはいかない、そんな立場になってきています。逆に今、いくつか課題を挙げさせていただきましてけれども、これは決して被災地の課題であると同時に、地域づくりを進めようとしている全国に共通する課題でもないかな、そんなふうに感じています。お手元に私の研究、というより最近書いた原稿の中で右段の「私の研究とは平たく言えば」というところ、少しだけ目をお通しいただきたいんですけど、「スポーツが人と人とを結びつけ、地域の輪」話すであるとか、みんなで協力するとか、輪になるということを再生して、より良い社会を作り出す力を持っているということについて、主に社会学的な手法で還元すれば、フィールドアウトを中心に研究しておりますけれども、地域の資源であるスポーツというものを総合的に活用した町づくりということが今とても必要とされている。この原稿の中では、子供たちの運動不足をどう解決、解消するかとか、あとは先程のイベントではありませんけれども、64ページというところに「パパと一緒に大冒険 in 南会津」というキャッチコピーも受けて、普段はお母さんと一緒に過ごす時間が長い子供たちに夏休みにパパと一緒に宿泊していろんなミッションにチャレンジしようということ、学生が企画したりだとか、今は仮設住宅に住んでいる高齢者の方々のロコモティブシンドローム予防事業とか、こういったことをやってきていますけれども、繰り返しになりますが、地域の資源であるスポーツというものを色々な視点から、おそらく福祉であったり、医療であったり、産業であったり、環境であったり、雇用といった地域の課題を解決することとスポーツというものはとても親和性がある、ひつつきやすいものだなあとということを福島の復興というものに関わっても感じておりますので、是非皆さんの地域でもスポーツが持つ無限の力を活用して、地域発の様々な取り組みを行っていただきたいなと。そんなことでまとめさせていただ

きます。

北村：ありがとうございました。長時間に渡る会でしたけれども、以上をもちまして本日の事例報告及び意見交換会を終了させていただきます。

北村：本日は本当に朝早くから雨の降る中、お集まりいただきましてありがとうございました。それから3名の両者の皆さん、お忙しい中、これも準備をしていただきまして、とても貴重な情報を発表していただきましてありがとうございました。そして、黒須先生、福島から、遠くからお越しいただきまして、非常に我々が考えなければいけないという部分が見えてきたようなコメントをいただけたと思っております。私先程も申し上げましたように、生涯スポーツということで、健康づくりっていうのが1番最初に頭に浮かぶんですけども、やはり健康づくりであったり、それからそこに繋がるようなスポーツの振興であったり、もっと広く言えば子供たちがスポーツが好きになって活動的な子供たちが沢山育ってくれて、活気のある町づくりができたという、非常に欲張りなセンターだと思えます。お集まりいただいた方々も先程申し上げました通り、学校関係の方もいらっしゃる、生涯スポーツ関係の方もいらっしゃる、健康づくり関係の方もいらっしゃるという、非常に欲張りな贅沢な協力者会議なのかなというふうに思っております。このセンターが皆さんの間の架け橋となればいいと思いますし、是非、こういうことはできないかなという部分があれば、我々にご相談いただければ、すべて私達でやましようということとは言えないと思うんですけども、我々ができる範囲で地域の為にこれからもご協力させていただきたいというふうに思っております。本当に今日は短い時間ではありましたが、また皆さんのそれぞれのところに持ち帰っていただきまして、何か役立つ会議であったなという形になれば幸いです。どうもありがとうございました。